

宇野千代全集

第十卷

宇野千代全集

第十卷

宇野千代全集 第十卷

昭和五十三年四月十日印刷

昭和五十三年四月二十日發行

著 者 宇野千代

發行者 高梨 茂

印刷者 山元正宜

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一八一七

電話〇三(五六二)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九七八

隨筆

二

目次

随筆 Ⅰ

仔 犬

11

花 日 記

20

親しい仲

25

若い娘は図々しいか

29

アメリカで見たお婆ちゃんたち

32

芸の国阿波

36

女のいのち

47

年 齢

53

夏と私の建てた家

66

ハチマキ好きの日本人

70

私の特技

78

何でも一度してみること

83

私の小説作法

86

男性と女性

89

一番良い着物を着て

99

ことばの持つ魔力

102

信じる

105

真の気力

108

避暑ぎらいの弁

121

女流作家ということ

失恋上手

「風の音」その他

未 練

那須の家

確信を持つこと唯一つ

ある詩人の青春と死

能力は天与のものか

雪の正月

文楽と私

淡路人形芝居の面白さ

122

125

140

145

149

152

165

168

171

175

179

ふるさとで思う

百歳おいを知らず

カントと天風先生

野仏と仙人

わたしの建てた家

夏目漱石を読む

女と勲章

五十年前の愛読者大会で

六十年前の生徒たち

弁当箱

ふるさとへ廻る

草を植える酔狂

223

私の一生に書いた作品の中で

226

手押し車

231

何が小説の材料か

235

温泉のお婆ちゃん

239

神さまはいるか

243

デニケンに魅せられて

264

よよと泣かない

268

二つの文体

272

真の勇氣を持った若者の話

275

もしあのとき

281

あ
と
が
き
書
誌

288 287

隨筆

Ⅱ

仔 犬

川端康成さんがまだ上野の桜木町に住んでおいでだった頃、私は犬を一匹貰う約束をしていた。この頃の川端さんは、もうすっかり犬を止めて小鳥ばかり飼っておいでだとか聴くが、その頃は、家中犬だらけだった。書斎にもいたし、茶の間にもいた。第一、ごめん下さいと言って玄関の扉をあけると、いきなり二三匹塊って出て来てわんわんと吠え立てた。障子も破れていたし、坐ろうと思うとどこにでも犬の毛が落ちていた。「駄目ですよ、あなたさつき喰べたばかりじゃないの。」川端さんのおくさんは、大抵は犬と話ばかりしておいでだった。

私はそういう川端さんの家の中を少し呆れて見ていた。自分はこんなに犬好きには決してなれないと思った。どっちかというと、犬嫌いの方かも知れなかったが、でも、その頃川端さんの家にいたワイヤー・ヘヤードの牝がじきに仔を生むと聴いて、人並みに飼ってみる気になった。

じきに仔犬は生れた。百日経てば親を離しても構わないとのことで、私は日を数えて、こっちから貰いに出掛けた。可愛い捲毛の仔犬だ。おくさんは自分で抱いて、私を送り乍ら、電車道の

ところまで連れて来て下すった。「大人しくするんですよ、」そう言っておくさんは、子供をよそへやるお母さんのようにして、私の自動車の中へ仔犬をそっとお置きになった。私はどうも、そんなに犬を可愛がりそうもないので、ちょっと困ったが、連れて帰ってみると、少しづつ可愛くなった。

その頃私は四谷のいまの家へ越したばかりで、自分のほかに仔犬でもいるとちょっと気持が紛れた。庭のない家で、街路に面したガラス窓の前の畳一畳ほどの板囲いの空地に、ときどき仔犬を入れておいた。「ハナちゃん」「ハナコ!」「ハナコちゃん!」いろいろに呼んだ。私は小説の中の人物の名前でも、変った名前にせず、梅子とか、平吉とかあり来りのものが好きで、仔犬もハナコとつけた。二階で仕事をしていると家のすぐ前で、「ハナちゃん!」「ハナコちゃん!」「ハナコ!」と、大騒ぎだ。近所の子供が、仔犬をからかっているのである。牛乳配達だの、自転車に乗った蕎麦屋の小僧だの、子供をつれたお婆さんだのまで、立ち止って見ている。ハナコは忽ち町内の人気者になったらしいのであるが、それはハナコが可愛い仔犬だからばかりではなく、ハナコと言う呼び易い名前が、ハナコの人気に半分くらいの力を持っていたのだと思うのである。だが、私は門さきの八釜しいのに閉口した。家の中へ入れておくと、「ハナちゃん!」と言つて子供が遊びに来る。ハナコも出たがって、キャンキャン鳴く。困った。

その夏の始め、私は目黒に小さい家を建てた。四谷の家では雑誌を始めたので、仕事は目黒の

家でした。裏は百坪足らずの庭があるので、ハナコも喜ぶと思って、一緒につれて行った。ハナコはとても喜んだ。一日中、芝生の上を転がって遊んでいた。私はいつでも避暑には行かないので、海に行った積りで、よく海水着一つになって、庭でハナコと遊んだ。裸で遊んでも平気なくらいで、ぐるりは茄子と胡瓜の畑だ。遊びに来る子供もないので、私のいない間は、ハナコは憂鬱そうだと、よく女中が言っていた。外から帰って、「ハナコは？」と訊くと、「あら、先刻までお庭におりましたんですけど、」と言いつつ、女中のとよは縁側に立って、遙か茄子畑の向うの方を見るのである。ゴルフリンクの方へ通じている白い道をまっしぐらにハナコらしい仔犬が駆けてこっちへ戻って来るところだ。「仕様がないうえ、そとへ出さないようにしなくちゃあ、」私は眉をひそめてその度に言ったが、田圃の中の一軒家なので、庭の外囲いになっていて櫓葉の生垣がまだまばらで、仔犬を外へ出さぬようにするということはなかなか面倒だ。とよはいつでも、「はい」と返事はしたが、ハナコは大概そとで遊んでいたらしい。血統書さえあれば、間違いないく二百円には売れるという名犬の癖に、ハナコはだんだん野良犬の風貌を備えて来た。「先生、ハナちゃんはお腹が大きいんじゃないやありませんでしょうか？」或る朝、街へ出るバスの停留場まで私を送り乍ら歩いて来る途中で、突然とよがそんなことを言い出した。先生というのは私のことなのだ。そう言えばハナコはそのそとした足どりで、いかにもだるそうに、私ととよの後からついて来る。ちょっとしたものを喰べ過ぎたくらいの腹の加減ではあるが、まだ生れて半年にな

るかならない仔犬が、お腹が大きくなるという筈はない。私はとよの卑俗な憶測を一笑に附してから、街へ出て行ったが、それから三日経った日の夜、そこから帰って玄関の扉を押すと、ばたと奥からとよが駆けて来て、「先生、ハナちゃんが赤ん坊を生みました。」と言う。私はものも言えない気持で、ちょっとした間女中の顔を見詰めていたが、行ってみると、ハナコは綿の敷いである箱の中で、仔犬のまた仔犬くらしいの仔犬三匹を、腹の中に抱くような格好で、あの仔犬のハナコと同じ犬だとはどうしても思えないような、極く自然な母親らしい落着きの中に、いかにも自然の勤めを済ませたと言う風な、ぐったりとした懶い様子で眠っていた。私は涙が出そうになった。人間ならば、まだやっと十五か六になったかならぬくらしいの娘の頃だろうに、それで、主人の私も知らぬ間にお腹が大きくなり仔犬を生んだと言うことが、犬であるだけに、却って哀れ深かった。ハナコの恋人は何犬であるか、まるで見当がつかなかった。

産婦のハナコは嘘のように丈夫だった。仔犬どもも忽ち母犬と同じくらしいの大きさになった。私は四谷の家へ行かない休みの日には、犬どもを庭へ放ち、自分は裸足になってよく芝刈りをした。百坪に足らない芝生なのに、私は青山のある大きな種苗店の店さきで見つけたアメリカ出来の芝刈り器を担ぎ出して、それをつかうのが面白さに無闇に芝刈りをしたのである。長いハンドルのような柄のついた鉄製の芝刈り器で、眼のさめるような色の赤い塗料で塗ってある。真夏の陽の直射の中を、私は長い芝刈り器の柄を押して、景気よく芝生の上を駆け廻る。カラカラと音